

多文化を
ささえる
人びと

ブラジル人の交流の場づくり

関西ブラジル人コミュニティ

二〇〇九年六月二八日、神戸の旧神戸移住センターで、在日ブラジル人の春の祭り「フェスタ・ジュニーナ」が開催された。主催したのは関



今年6月3日、海外移住と文化の交流センターとして新装開館した旧神戸移住センター。CBKはこの3階に置かれている

関西における在日ブラジル人は関東や東海地方に比べ圧倒的に少ない。関西ブラジル人コミュニティはそんな彼らとともにすでに二〇年のコミュニティ活動を続けてきた。そこにはメンバーが少数で分散するが故の活動の必要性があった

西ブラジル人コミュニティ(CBK)である。一九九四年より例年開催しているが、今年はほぼ五〇〇人もの参加があり、大盛況であった。

CBKが現在活動の拠点を置く「旧神戸移住センター」(一九二八年設立)は、かつて神戸港から移民として南米に向けて出発した人びとが、渡航の準備のため最後の数日をすごした施設で、日系ブラジル移民の子孫にとっては縁の深い建物である。現在は神戸市の管理下で、海外移住と文化の交流センターとして改装され、アメリカ大陸を中心とする日系移民の歴史資料を展示している。

コミュニティ活動の始まり

CBKの設立者、松原マリナさんが、父の祖国の地を踏んだのは一九八八年であった。のちに日本プロサッカーチームのコーチとなる夫、ネルソン勝さんの同伴者として来日



フェスタ・ジュニーナ(6月祭)。農民の恰好でダンスをし、思う存分たのしむブラジルの伝統は日本でも引き継がれている

地域でブラジル人をささえて
設立以来まもなく一〇年を迎えるCBKだが、決して大きな組織ではなく、派手な活動もしてこなかった。それでも、今日まで活動を続けることができた理由はなにかあったらう。「ひとつは、無理をせず、地域のブラジル人の規模と需要に沿った活動をめざしてきたからでは」と松原さんはいう。関西のブラジル人は、数



ポルトガル語教室。子どもたちの母語は日本語になったが、家族やブラジルとの紐帯としてポルトガル語を学ばせたい親は多い

の湖西、湖南地域をのぞけば、近隣に集住地域がなく、大きな組織づくりにエネルギーを費やす必要はなかった。一方、CBKの活動は地域的に分散し、多様な生活基盤をもつブラジル人の経済や生活支援にあまり重点をおいていない。その分、ブラジル人、とくに子どもたちの言語・文化活動支援やブラジル人と日本人との交流を重視してきた。

日系を中心とする在日ブラジル人の多くは、来日以来すでに一五年近くを経過した。幼少のころ来日した子どもの多くが成人した。ブラジル人集住地と異なり、日本で生まれた子どもたちの多くは、日本の学校に通い、日本語環境で育ったため、ポルトガル語はほとんどできない。一時と異なり、ブラジルへの帰国ではなく、日本定住の道を選択した人びとはめずらしくない。

した。神戸に移り住んだ松原マリナさんは、一九九九年、神戸長田区の「たかとりコミュニティセンター」を拠点に活動するワールドキッズコミュニティを通じて、日系ブラジル人の子どもたちへの教育支援やブラジル人の生活相談にかかわることになった。

数こそ少ないものの、兵庫県でもブラジルからの移民労働者の子どもたちは、ことばや教育の問題に直面しはじめていた。日本語が十分でないために授業についていけず、両親は子どもの学校との連絡にさえ不自由していた。同年代の子どもを二人抱えていた松原さんにとって決して人ごとではなかった。日本語の能力不足は、生活情報の不足を意味し、医療や行政サービスを受けられないなどの問題も起こしていた。毎日の労働に追われる一方で、自分たちの生活圏に閉じこもりがちなブラジル

今後のCBKの役割

かといって、ブラジル人が日本人に同化し、日本社会にすんなり融合することはないだろう。これからも彼らへの支援は必要であろう。ブラジル人の少ないこの地では、ブラジルへ渡った日系移民が何十年も祖国を思い、文化やことばを受けついできたように、いまの日本にはブラジルのことばや文化を身につけ、ブラジルを祖国とおもう人びとがいる。

松原さんはいく。「関西の在日ブラジル人にとって、年に数回でも仲間と集い、ポルトガル語で語りあう場があることだけでも大きな安らぎです。子どもたちにとっては、ポルトガル語を学ぶことだけでも」。たとえ少しでも、ポルトガル語を学ぶことは、ブラジル人としての自覚と誇りをたもつうえで欠かせないという事実、ブラジル語教室に通い、自信をもった子ども一人が京都外国語大学でブラジルポルトガル語を専攻することになった。これは、みんなの大きな励みにもなっている。

二〇〇八年春、ブラジル移民一〇〇周年記念行事が神戸市内で数週間わたって開催され、のべ一万人が訪れた。このあと、CBKの行事への参加者はブラジル人、日本人ともに急増している。旧神戸移住センターの改装が大きく報道されたこと

しょうじ ひろし
庄司博史
民博 民族社会研究所
言語学・言語政策論。二〇〇四年に特別展「多みんぞくニホン」を企画した。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共・編著書に『多みんぞくニホン』(二〇〇四年)『事典 日本の多言語社会』(二〇〇五年)など。



松原マリナ、ネルソン勝夫妻。在日ブラジル人のさまざまな催しに長年にわたり貢献してきた

人は、社会との接点が希薄であった。在日ブラジル人への支援活動にかかわりはじめた松原さんは、関西におけるブラジル人支援組織の必要性を感じるようになった。二〇〇一年、松原さんを中心に設立されたCBKは、独立とともに神戸の町をみわたす高台にある旧神戸移住センターに移ることになった。以来、ポルトガ

ブラジル移民100周年にあたる2008年、神戸市のポートアイランドで大規模な記念祭が催された



も関係がある。理由はどうであれ、ブラジル人との交流活動にボランティア・スタッフとして加わる人もそれにつれ増え、三十数名になった。「不況の真つただ中ですが、少しでも多くの地域のブラジル人、市民を取り込んだ交流の場をめざしたい。これからも日本社会の、地域の一員として活躍するブラジル人を増やすことが目的です」。そういう松原さんの楽観的な展望こそがCBKの発展を支えているように思えた。